

「ゼミBカラス遺棄事件」

昼休み、ゼミBに所属している七人は、6501教室で昼ごはんを食べようと、集まって向かっていった。それぞれが談笑に盛り上がる中、教室に着くと、Hの机にカラスの死骸が無造作に置かれていた。

驚愕を隠せない各々、S氏が教務課に駆け込もうとすると、正義感あふれるノイン氏が、皆を引き留め宣言する。

「いや、このカラスは明らかに人の手によって置かれたものだ。」

Sが反論する。

「外からやってきた可能性だってあるだろ。」

するとH氏が反論する。

「いやあ、朝から雨が降ってたからそれはないよー。だって、このカラス全然濡れてないよ？ 私悲しいよお。みんなと仲良くなれたと思ったのにい。」

堀尾が顔を手で覆い騒ぎ出す。

周りの女子たちは堀尾を庇い、慰め出す。

「別に、この中の人間がやったとは限らないだろ。いいから、教務課呼ぶぞ。」
鋭くN氏が反論する。

「いや、外部の人間の可能性は低いよ。ここは大学の敷地内だし、外からの来訪者は、守衛と、下の学務科の人間から怪しまれずにここに入る必要がある。同じ武蔵野大生に悪意があったとしても、数多ある教室からたまたまここが選ばれたなんて考えにくいよ。」

K氏が付け加える。

「しかも、ここは5階デース。それに、そのような無差別犯がわざわざ前日にカラスを用意しているなんてのも不自然デース。」

Y氏が口を開く。

「つまり、犯人は創作ゼミに関わっている人間ということ。」

「だとしても、俺たちだけで考えるより、教務課を呼んだほうがいいに決まってるだろ。」
U氏がついに固い口を開く

「S、犯人がこの中にいるという状況で、それをいち早く有耶無耶にしようとするお前は、とても怪しく見えるぞ。」

塩澤は舌打ちをし、席に座る。

「分かったよ。ならとつとと犯人探しをしようじゃねえか。」

それぞれがカラスの死骸を囲うように円を作る。犯人探しが始まるのだった。

Z氏が状況を整理する。

「まず、カラスは間違いなく人の手に殺されているということ、そして死体を触った感じ、カチカチに固まっているから、死後確実に数時間は経過している。カラスの死体が乾いて

いることから、少なくとも今日作られたものでないことも確か。」

H氏は相変わらず顔を覆い、泣きじゃくっていた。

「うう、どうして私なの……。」

Y氏が口を開く

「先ずはアリバイがあるか、だね。それぞれ説明してもらってもいいかな。」

沈黙の中、口を開いたのはN氏だった。

「私は今日一限が空きコマで、二限から大学に来てたんだ。平安文学特別講義だけど、他に取ってる人いたっけ？」

同調するように、H、Y、U、K、が手を挙げ頷く。

「ありがとう。つまり、真と塩澤以外は二限の授業に出てた訳だ。さっき、この教室の出席リーダーを確認したんだけど、一限は教職の授業が入っていて、二限は空きコマになっていたんだ。」

K氏が続けるように話す

「よって、カラスを置くことができる時間は二限目が始まって終わるまでの百分間。二限の終わりから、私たちは合流していた以上、私たちがここに来る直前の、昼休みの間に置く事は不可能、という事デース。」

その場にいる皆の視線が、塩澤と真に集まる。

「俺を疑うってのか？冗談じゃねえ。」

Sが声を荒げる。

隣にいたKが軽く宥めると、N氏が話し始める。

「とりあえず、二人がその時間何をしていたのか聞こうか。」

Kが証言を始める。

「俺はお前らとは違う別の授業をとってたんだ、ほら去年あっただろ、中世文学基礎。去年落単したから再履修してたんだよ。」

「え、」

一人が困惑の声を上げる。それはもう1人疑いの目を向けられている真だった。

「S君、その授業にいないはずだよ。私、その授業とってるけど、S君の名前が点呼で呼ばれた覚えはないよ。」

それを聞いた皆の視線が塩澤に集まる。

「あー、間違えた、間違えた。近世文学特別講義だ。」

U氏が追い打ちをかけるように追求する

「いや、俺たち文学部が二限に取れる授業は平安文学特講だけだ。落単していたとしても、中世文学基礎以外にはありえない。」

「……。」

S氏は黙りこくり、顔を机に俯かせた。

数秒の沈黙ののち、N氏が重い口を開く。

「その沈黙は、肯定という事でいいのかな？」

堀尾氏が叫ぶ。

「なんでそんなことしたの！酷いよ！私みんなと仲良くなりたかっただけなのに！私なんか悪いことした！？」

H氏の叫びを聞き、塩澤は机をぼんと思い切り叩く。

「ふざけんな！何もしてねえだど！？テメエみてえな腹黒野郎がどのツラ下げてそんなこと抜かしやがる！」

突然の怒声に皆が口を噤む。

「俺は、テメエのその自分勝手さにはらわたが煮えくりかえりそうだったぜ。いつも俺の席に荷物を無遠慮に置きやがって。それをどかせといけば何度も嫌そうな顔をしたかと思えば、次の週にはおんなじことをくりかしやがる！」

堀尾は目に涙を浮かべ、泣き始める。しかし、塩澤は知ったことではないと怒声を浴びせる。

「テメエはしらねえようだがな、周りの取り巻きも、このゼミの連中もみんなテメエの陰口を言ってたぜ？自分勝手に我儘だってな！お前みたいなのはな！これぐらいの嫌がらせを受けて当然だったんだよ！」

その場の雰囲気になえかねたのか、N氏が大声で静止する。

「だからといって！このような形で危害を加えた君に正しさなんてない。少なくとも、君の嫌がらせのために殺された鴉には何の罪もないでしょ！」

額縁がそれに乗っかるように責め立てる

「そうだよ、それは歴とした犯罪、鳥類保護法違反に、器物損壊罪だよ。」

他の人間も、同調するように塩澤を責め立てる。

「ちげえよ。」

塩澤は小さな声でそう呟く。

「俺はやってない。」

その声を聞いた皆が黙る。

「俺はカラスを殺してない。カラスはここに來た時死んでたんだ。教壇の上に置かれてた。」

堀尾氏が叫ぶ。

「嘘！今更どういうつもり！？最低！」

「本当だ！試しに教壇の周りを見てみろよ。」

椅子から立ち上がり、何人かが教壇の周りを確認すると、乾いたカラスの羽根が机が所々に散乱していた。

「見ただろ？乾いたカラスの羽がそこに散乱してるってことは、少なくともそこに一度カラスが置かれてたって訳だ。もし俺が殺してここに持ってきたとして、わざわざカラスを教壇の上に置く理由は何だ？そんなもんはねえはずだぜ。誰かに見られちゃまずい状況で、

そんなめんどくせえことをする必要はないんだからな。つまり、少なくともここには、俺以外にカラスを殺した真犯人がいるってことさ。」

カラスを殺した犯人は一体……？